

## もう一つの舎密局 (01・6・16)

川崎元雄 (昭13・理乙)

井垣さんから話をして欲しいという要請が三月頃にございました。たまたま、数年前に京都舎密局について調べた資料がありましたのでお引き受けしました。

日本に二つの舎密局がありました。一番古いのは、もちろん三高の前身である大阪の舎密局ですが、そのほかに京都に京都舎密局がありました。もうひとつの舎密局とはそのことです。

京都舎密局を話題に選びましたのは、私の母方の祖父 小泉俊太郎が京都舎密局の受業生を経て職員を勤めたこと、祖父から三高時代に舎密局の話聞いたこと、又舎密局の跡地にできた銅駝小学校を私が卒業したことなど、縁が深いことによります。

大阪の舎密局は一年で名前が変わったが、三高の前身としていつまでも語り継がれるのに、京都舎密局は一〇年余り続いたにもかかわらず、その歴史を受け継ぐところがなく消

滅してしまったことに哀れを感じています。

## 明治初期の京都の勸業政策

明治維新で東京遷都が行われたのは明治二年（一八六九）です。明治天皇は一度東京に行かれて直ぐ戻られましたが、再び東京に行かれ、政府も移りました。京都では反対運動が起こり、政府は困っていました。明治天皇は京都が急速にさびれることを心配されて、明治三年（一八七〇）に産業基金もとだてきんとして五万円を二度にわたって京都に下賜され、さらに政府は勸業資金として一五万円を貸し与えました。このような勸業資金という形で京都の産業を興せということになったのですが、その時の国家予算が五九万円ですから、この二五万円という金は当時としては大金です。

このとき京都の勸業政策を遂行した中心人物が三人おられました。一人が榎村正直まさなお、大参事として出仕という形で京都府に派遣され、後、二代目知事となり、一四年まで知事を勤めました。長州人で木戸孝允の懐刀で、この勸業政策の責任者です。それから山本覚馬かくま、明治政府になって顧問という形で京都に來られ、實際面での庶務・会計を担われました。三番目が、明石博高ひろあきで、氏の略歴はあとで述べます。彼の献策により、榎村知事は二五万円の資金を基にして京都に洋式の企業を導入するため、次に掲げるような勸業施設を次々

に設置しました。カッコは事業開始の年月です。

・舎密局（明治三年一二月）

・勸業場（四年二月）

河原町二条下ル（現在の京都ホテルの東北）に造成され、勸業政策の推進をはかりました。

・養蚕所（四年四月）

・博覧会（四年一〇月）

・製革場（四年一二月）

・牧畜場（五年二月）

牧畜場は荒神橋の東側の二万五千坪の土地に牛と羊を飼って、品種改良をしたり、牛乳をしぼったり、そのようなことを始めました。

・女紅場にようば（五年二月）

ローレベルとハイレベルの二つの種類がありました。前者は遊女芸妓に職業訓練を与えて正業に復することをはかり、後者は上流家庭の娘さんとか奥さんが対象で高等女学校の教育を行うことを目的としました。京都府立第一高女の前身で、川端通から丸太町橋を渡

った左側にありました。私の母もこの卒業生であります。朝遅刻しそうになると、人力車に乗って行ったという話を聞いたことがあります。

・製糸場（五年六月）

・製靴場（六年二月）

・栽培試験場（六年二月）

・伏見製作所（鉄工所六年一〇月）

宇治川の水力を動力源とする機械工場です。

・織殿（八年十一月）

・染殿（八年十一月）

・集産場（九年一二月）

・西陣織物会所（一〇年九月）

・化学校（一〇年八月）

このような勧業施設を分類しますと教育施設、試験場と模範工場（そこで製品を作ってみせる、あるいは外国から機械を持ってきて新しいものを作って、こういうふうにしたらできるということをやってみせるところ）。それから産物の展示場、そういう三つに分類

できるかと思いません。こういうことが京都では明治初期に行われました。東京でも計画していたようですけれども、実際には大分遅れました。

当時の人口は明治六年の統計ですと、全国が三三一一万で、京都府は三〇万位だったのではないかと思います。それで京都府民の生業、つまり何をして食っていたかというところ、農業五三%、商業一四%、工業九%、その他二四%で、農業をしている人が半分以上でした。勸業施設のなかには農業、畜産業に関係するものが相当数あります。

これらの事業は施設、人件費は府が負担し、運営は民間に任されていました。

### 京都舎密局

ご承知のように舎密せいみとはオランダ語で化学を意味するシエミーを漢字化したもので、私の祖父はセイミと言わないでセミと言っていました。

舎密局は生徒を集めて物理化学を教える学校であり、その中に試験、研究設備を持って分析、検定試験を行い、あるいは化学の応用を研究する工業試験所でもありました。それから勸業施設全てを通じてですけれども、特徴は自分のところで製造した製品を市民に販売していたことです。京都舎密局で製造した薬品を販売する有名な薬屋さんに祖父の家内の親父の店がありました。

京都舎密局は勸業施設建設事業のトップを切つて、明治三年一二月二二日に仮開局をしております。これは丁度三高の前身の大阪舎密局ができた一年数ヶ月後です。場所は木屋町二条下がる、現在の京都ホテルの地で、勸業場の構内の東北部です。祖父の話によりまずと勸業場予定地内に火消し小屋があり、そこを仮局として、明石さんは自分の蔵書とか実験器具を持ち込んで開局のはこびになりました。

開局した舎密局では、これから造る施設を使って大いに勉強して事業を起こしてくれというこゝとで、生徒に理化学を教えました。またそのほかに、自家製品として清涼飲料リモナーデ、これはクエン酸に砂糖を入れたものでコレラに効くと言われました。それから公膳ポンス、これは焼酎と砂糖と橙汁を入れたもの、これらのものを瓶につめて市販を始めました。また、薬物の真贋の検定等も開始しました。

明治五年の正月に、鴨川の西岸二条夷川間、現在ホテルフジタのある場所に分局二棟が完成して、医薬、繊維の洗浄用の石鹼、氷砂糖の製造装置、陶磁器、七宝、ガラス等の実験室ができました。

さらに、明治六年八月に、鴨川と土手町通りの間に二階建ての本局が新築完成して、受講生を大募集するとともに、各種製品の製造装置や実験設備が充実して事業が本格化しました。翌七年八月にはこれらの事業が成功したという報告を政府に提出しています。この

間の収入が約五千円で出費が一万円、受業生は延べ三千人でした。製造の内訳をみると、リモナーデが一万八千瓶、氷砂糖が一万五千斤、石鹼七〇箱等で、いくらで売ったか分かりませんが、その頃のお米が一斗三三銭でした。

明治六年八月新築落成した京都舎密局の外観を図1に示します。また、明治八年頃の木屋町二条周辺地図を『島津創業記念資料館案内』から図2に転載しました。

それから本局ができるまでの間に、南山城に炭酸泉源を見付けて採取場を設置、胃腸に効能があるとして瓶詰めにして販売しています。また、清水の音羽の滝横にビール醸造所を作りまして、ドイツか

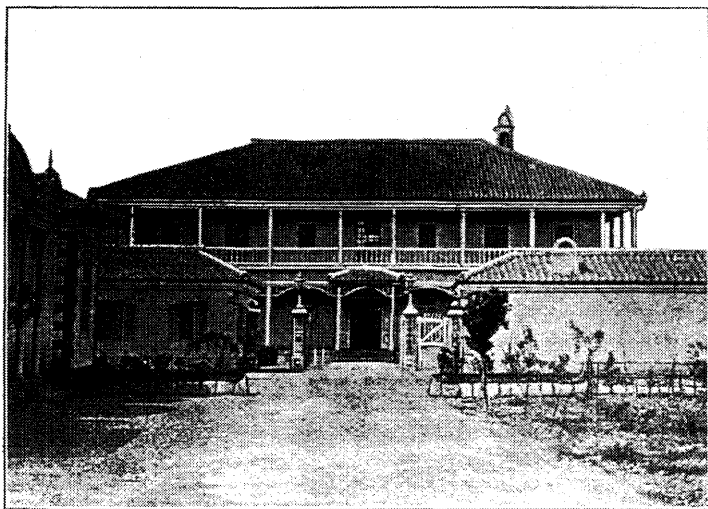


図1 京都舎密局

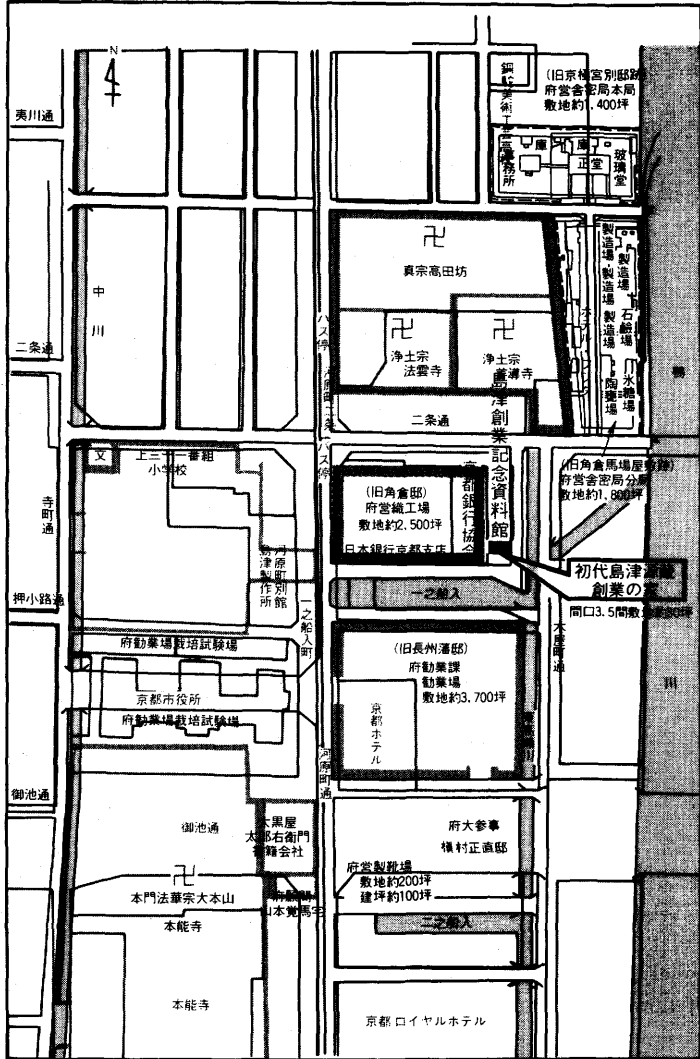


図2 明治8年頃の木屋町二条周辺地図



らビール醸造技術を導入しました。

明治八年二月になって、局内に京都官立司薬場が併置されました。これは衛生試験所の前身になるもので、輸入薬品の検定をする役所です。それに政府からオランダ人の薬学士へールツさんを派遣してもらい、無給で化学薬学の講義をしてもらいました。外人教師による講義、指導と司薬場の設備の利用はおおいに役立ち盛況でした。しかし、京都に輸入薬品はあまり入って来ないという理由で、政府は九年八月をもって司薬場を廃止し、へールツさんも横浜に引き上げました。

私の祖父の小泉俊太郎は明治九年に明石さんの勧めで舎密局の役人となり、明石さんの仕事に協力しています。

明治一〇年二月には明治天皇が行幸されて諸設備をご覧になりました。そのとき明石さんが舎密局の趣旨を奏上し、職員の商品を天覧に供し、ビール、炭酸水各一瓶を献上しました。また一〇年の八月には宮津舎密試験所が開局しました。

その頃の舎密局専任職員は十数名で、勤務時間は午前八時から午後四時まででした。記録によれば、研究所の蔵書は洋書が五二和書が八九で、洋書は多分オランダ語です。

へールツさんが京都を去って、舎密局もさびれ始めました。明石さんは小泉と相談して、明治十一年三月からドイツ人のワグネル博士をへールツさんの後任として招聘しました。

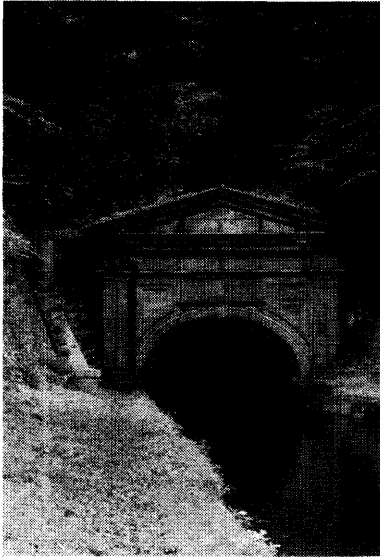
三年契約で月給が四〇〇円そのときの明石さんは二五円、小泉は六円でした。如何に外人教師を高給で受け入れたかが分かります。

ワグネル博士は日本に來られて一〇年、日本語が話せ通訳なしに講義ができたいへんな実力者でした。舎密局で化学工芸全般の指導にあたった他、医学校で理化学の講義をされました。京都在任中に指導を受けて名をなしたおもな人に、懶島津製作所の創立者島津源藏、化学製薬の小泉俊太郎、その他前田嘉右衛門、永樂和全、入江道仙等の方がおられます。ワグネル博士が任期を終え、大きな功績を残して東京へ去られた後は、京都の化学界は火が消えたようになりました。

### 舎密局の終焉とその後

明治一四年榎村知事が元老院議員となって退任されると、後任の北垣国道知事は赤字の多い府営事業の廃止を決議されました。この決議で、勸業場を除く勸業施設は全て民間に六〇万円で払い下げられました。民営化された施設の多くはその後経営難に陥り、その事業は殆どが中止になってしまいました。

北垣知事によって廃止が決定したとき、明石さんは憤然と辞表をたたきつけ、反対の意を表明されました。そして、一四年一月の末頃、明石さんは①舎密局②染殿③伏見鉄工所



琵琶湖疎水 第三トンネル

の三つの払い下げを受け、自分で経営を始めました。しかし、その経営は順調に行かず、年賦の支払いも滞り勝ちになり、明石さんは明治一八年これを売却して手を引かれました。譲渡を受けた人は機械、設備を売却し、舎密局本局の地所、家屋は京都倶楽部となり、その建物は明治二八年一月に失火で全焼しました。焼け跡のうち、本局のあった部分は銅駝小学校（現京都市立銅駝工芸高等学校）となり、他は分割して処分されました。こうして、京都舎密局の建物全部が二〇年近くで全て無くなってしまったのです。

勧業施設の払い下げによって京都府は約六〇万円の収入がありました。この資金を基にして、北垣知事は琵琶湖疎水工事を行つたということ、私が三高時代に存命だった祖父から聞いたことがあります。本当かと思つて調べてみましたら、琵琶湖疎水は、明治一八年六月に起工しまして二三年四月に第一疎水が完成しております。その総工費は一二五万円で、内訳は国庫補助が二〇万円、それから勧業基

立金の回収が、先の六〇万円に利息を含んで八〇万円、京都市民の負担が二五万円で、これで勘定が合います。勸業施設は無くなりましたけれども、そのお金の大部分が琵琶湖疎水に使われたわけです。

### 京都舎密局をめぐる三人の立役者

明石博高（一八三九—一九一〇）

明石博高は京都四条通堀川西入るで医薬を業とする家に生まれました。少年時代から和漢、算数、医学、理化学をいろいろな方に学んだ篤学の士でした。丁度幕末、まだ維新になる前に京都医学研究会煉真舎れんしんじやを有志と組織して、研究発表をしたりしていました。京都医学研究会はお医者さんを中心にした会で、鳥羽伏見の戦いで怪我人を助け、赤十字社の始めのような活動をしました。榎村氏はこの煉真舎の活動を知っていました。

明治元年（一八六八）三〇才のとき、招かれて大阪病院薬局主任になりました。翌明治二年大阪に舎密局ができ、そこで学生の受業生から助手取締になります。そして、ハラタマ先生に師事して医学、理化学、製薬学、及び測量学を、またボードインに内科学を学びました。

明治三年（一八七〇）八月に榎村知事の招きにより、それまで勤めていた大阪病院及び

大阪舎密局を辞め、一〇月から京都府に出仕し、彼の建議により京都舎密局が設けられ、す、その主管となりました。

明治三年一〇月より京都の勸業施設政策を積極的に推進、特に京都舎密局の発展に力を尽くしたことは、これまで述べてきた通りです。明治一四年に舎密局から手を引いた後は、医業に専心しました。三高同窓会名簿の旧職員の手頭に記載されています。

なお、元神戸大学工学部教授、故明石博吉氏（昭14理甲）は博高氏の孫です。

#### ワグネル（一八三一一一八九二）

ゴットフリード　ワグネルはドイツハノーバーで生まれて、ゲッチンゲン大学を卒業し、博士号を取得しました。明治元（一八六八）年に来日され、長崎で石鹼の製造を試みましたが、時期尚早のため中止を余儀なくされ、佐賀藩の委嘱を受けて有田に赴き、コバルト釉薬を初めて使用して有田焼の改良に成功しました。ワグネル先生は陶磁器やガラスのほか、石鹼や染色にも貢献された。明治五（一八七二）年に東京に移り、大学南校、東校の講師を勤め、また、ウィーン万博の欧日両政府顧問として我が国の出品物の斡旋もされました。明治一一（一八七八）年から三年間京都舎密局で化学工芸の指導に大きな成果をあげたことは既に述べましたが、明治一四（一八八一）年に東京へ戻って東京帝大理学部で製造

化学の教師、明治一七（一九八四）年に東京職工学校（後の東京工業大学）の教師をされました。

明治二五（一八九二）年死去、東京の青山墓地に埋葬されました。わが国の陶磁器、七宝、硝子の着色、染色等の改良に大きい功績を残され、勲三等を授与されました。

記念碑は京都岡崎公園と東京工大構内にあります。岡崎公園の像は図書館の北側、交番の裏に二条通りに面して立っておりまして、高さが四メートル幅が五メートルの大変立派なものです。岡崎公園内にあるワグネル博士の記念碑を図3に示します。その銅像の原型が京都市工業試験場の玄関に飾ってあります。

島津創業記念資料館には「ワグネル先生



図3 ワグネル博士顕彰碑——京都市岡崎公園

は京都の近代工業の祖である」と初代社長の島津源藏氏が書かれた資料や、ワグネル先生から譲り受けた木製の足踏み旋盤が展示されています。

#### 小泉俊太郎（一八五五—一九三七）

私の祖父、小泉俊太郎は大阪天満の裕福な米問屋の長男として生まれましたが、幕末に家が没落して、義母を伴って京都へ逃れて来ました。そのとき義母は、お前は商売に向いていない、だから勉強しろと言いました。そんなこともあつて、明治初年から欧学舎でドルフレーマン師にドイツ語、ラテン語を、舎密局で明石さんに薬化学を、療病院でヨネル師、半井氏に医学を学びました。

明治九（一八七六）年二〇才の時、義父が借財を残して頓死し、生活に困り明石氏の勧めで京都舎密局の役人になりました。先程申しましたように月俸が六円でしたからアルバイトで家計を助ける必要がありました。それで、夜間に二条の夜学校で薬屋の小僧にドイツ語やラテン語を教えた他、家に小僧を雇って塩化金、硝酸銀等を作り、家計を助けました。

舎密局在任中はワグネル博士に可愛がられて種々の指導を受けました。舎密局が消滅しますと、小泉商店として独立して製薬業を始め、試薬、蒸留水の製造、錠剤機の開発等をも

行い、戦前その事業は盛況でした。

京都の古い薬種商の織田家の一人娘と結婚し、二男三女を設けました。長男で織田家の養子となった織田宇一郎は、明治四〇（一九〇七）年、三高第2部理・農・薬学科を卒業、東京帝大の薬学科に進みました。ちなみに石橋栄達先生は明治四一年で同じ学科のご卒業で、大変親しくしていました。長女は日本新薬俵の創業者である市野瀬潜に嫁しました。私の母は二女です。

小泉は日本で薬剤師免状の第一号を取得、京都薬剤師会会頭を一五年勤めました。日本薬学界名誉会員です。

明治一二年には先程のドイツ語のレーマン先生の門下生で、同窓会レーマン会を設立しました。このレーマン会が明治一七（一八八四）年、私立独逸学校を設立し、別科として薬学科を開設しました。その後、種々の変遷を経て、京都薬学専門学校（現在の京都薬科大学）になりました。祖父は長い間この学校の理事長を勤めました。

以上、京都舎密局の発端から終焉までについて述べました。まとまりのないお話でしたが、ご静聴御礼申し上げます。なお、『島津創業記念資料館案内』から「明治八年頃の木屋町二条周辺の地図」と「ワグネル博士の記念碑」を転載させて頂きました。有難うございました。

（甲南大学名誉教授）



参考文献

- 京都府誌 卷中 第9編 第3章 工業  
京都の歴史 4 仏教大学編 (1995) 京都新聞社  
明治文化と明石博高翁 田中緑紅編著 (昭和17年) 明石博高翁顕彰会  
小泉俊太郎翁伝 川崎近太郎記 (昭和12年) 私版  
明石博高と舎密局 宮本二郎 三高同窓会 会報45号  
京都舎密局 宮本二郎 三高同窓会 会報47号  
『稿本神陵史』にみる明石博高 宮本二郎 三高同窓会 会報48号  
島津創業記念資料館案内